

有部の修行道論をめぐる

講師 阿部 真也

有部の修行体系といっても、現存する有部論書を見ると、その中でかなりの変遷がある。それらの中で、最も整理された形となっているのは『俱舍論』『賢聖品』である。しかし、教理的に大きく進んだのは『大毘婆沙論』による。

最初の段階は心身の準備からとなる。まず、出家のための戒を守る事から始める。そして、聞所成の慧↓思所成の慧↓修所成の慧、と進む。すなわち、信頼する師の教えを聞き、次に、自ら理に基づいて考え、そして、三昧を行じ、ある種の智慧を得るのである。

また、三昧を行じるために必要な事として次の三つを挙げる。①身と心の二つをもって遠離する ②この遠離のためには少欲と満足が必要である ③聖者になるための準備事項として四つの聖種（衣に満足する事・施された食に満足する事・臥座具に満足する事・断と修とを楽しむ事）。執着の対象への欲求を、しばらく押さえるために前の三つがあり、永久に押さえるために最後に一つがあるとしている。以上が、心身の準備、すなわち、聖道に向かう準備である。

次に、三つの修習に進む。三賢あるいは順解脱分と呼ばれるものである。不淨観と入出息念による修習↓四念住を個別に修する（別相念住）↓四念住を総合して修する

（総相念住）。最初の段階は、通常「五停心観」と呼ばれているもので、『俱舍論』では、他には触れずに、この二つのみを説いている。これは、『俱舍論』独自のものではない。

不淨観は次の四つの屍体の様相を観察するものである。しかし、これによって煩惱を押さえる事はできるが、断ずる事は出来ないとする。入出息念は、六種ある。「数」、「随」、「止」、「観」、「転」、「浄」である。

この二つによって、奢摩他を全うし、次に毘鉢舍那を成すために念住の修習をなさなければならない。つまり、不淨観と入出息念の二つが心の静止の修練であり、続く四念住は智慧による観察の修練である。身・受・心・法を自相と共相とによって観察することである。まず個別に観察した後、合して無常・苦・空・非我の四行相をもって観察する。この四念住の段階において初めて四諦の観察に進むが、まだ四諦を正しく観察することはできない。しかし、後に四諦を正しく見るための準備がなされるという。

そして、四善根の最初が生じてくる。四善根とは、煖、頂、忍、世第一法の四つであり、この順に修行は進んでいく。順決択分ともいう。

四念住を総合して修した後に、煖という善根が次第に生じて来る。内容は、四諦を十六行相によって観ずるものである。四諦とは、苦・集・滅・道、の事であり、十六行相をもって、とは四諦各々について、四通りに観ずる事であ

る。さらに、欲界の四諦と色界・無色界の四諦があり、合計で三十二行相となる。このように、四諦を長い期間に渡って観ずるのが煖であり、下品↓中品↓上品と進んでいく。そして、煖を得たものは、善根を断じ退する事があっても必ず涅槃に至る、としている。

上品の煖に続いて生じるのが頂である。頂も、煖と同様に、四諦を十六行相でもって観ずるものである。ただ、より優れているので別の名にしている、とある。頂と煖は退する事があるので動善根という。対して、忍と世第一法は退する事がないので不動である。頂と忍の間が、一つの区切りになっているといえる。頂も下品↓中品↓上品と進んでいく。頂を得ると、悪趣に行くかもしれないが決して善根を断たないとする。善根を断ずることは無い、という点において煖よりも勝れている。

そして、忍↓世第一法と進み、いよいよ見道にはいつていくのである。ただし、忍が組み込まれたのは『大毘婆沙論』からである、という点は、注意する必要がある。それ以前は、忍を除いた三項目だったのである。